Result

１．一文の文字数の比較結果

以下のグラフのように、第一期～第三期に共通する特徴は、70文字以上の文が存在することである。

第一期1933年～1937年

第二期1938年～1945年

第三期1946年～1948年

２．句読点の数の比較結果

　この第一期～第三期に共通して、1ページ当たり50～60個の句読点の出現率が高く、他の作者に比してもかなり高い。

Discussion

 太宰治作品の文体についての考察

　太宰治の16年間の作家活動が一般的に第一期から第三期までに分けられていることと、文体の変化とは区別して考えるべきである。太宰治は一文の長さを変化させたり、句読点を多用する詩文の文体を初期に生み出し、その後発展させていったと考えられる。特に、80文字以上の長文と句読点の多さが彼の文体の特徴となっている。

　「走れメロス」の105文字の長文は、メロスが精根尽き果てる様子を表現し、「人間失格」では、一人の人間の告白の場を生み出すことになる。

　太宰治は作家活動を始めた23歳の頃から、長文を使用する意味について自覚があり、自分の文体を意識的に発展させ、最後の作品「人間失格」にたどり着いたと見るべきだろう。